

IV 道徳 2年次の成果と課題

1 成果

(1) 道徳的価値と自己との関わりを意識した学習問題が生まれる場

主体的に学ぶ子どもを支えていく鍵となるのが、まぎれもない問題意識である。道徳的価値に照らして考え、自分事として自身の生き方を見つめていく子どもがいる授業をどう創っていくかは、授業者自身がどこに問題意識をもつかに左右される。

教材と出会い、印象的な場面を出し合う。4月の段階では、選んだ印象的な場面が広域に渡り、学習問題に焦点化するまで相当な時間がかかったものの、授業回数を重ねるごとに、教材が語りかけてくる道徳的価値と印象的な場面が響き合った状態で浮かび上がってくるようになった。導入で示す子どもたちから取ったアンケートにも関連してくるのかもしれない。授業の核にふれる道徳的価値に沿ったアンケートを取るのだが、その時点で今までの自分と対峙することになる。テーマに対してクラスの全体的割合も提示すると、友達がどんな考え方、感じ方をしているのかを知る段階ともなる。子どもたちの省察の始まりである。テーマとなる道徳的価値に照らし、自分を改めて捉え始めた子どもたちは、すでに自分事として考え始めている。アンケートと向き合った時点で、自然と教材とのつながりを感じ取っているのではないかと思う。アンケート結果を紹介する際留意したことは次の三つである。

① 「自分もそう思う」と同調できたり、安堵感を抱いたりできる内容

② 少数派ではあるが意外性のある内容

③ アンケートを取ること自体が道徳的価値の押しつけにならないようにする。

印象的な場面について語る子どもたちは「ふつうならこんなふうには言わないのに（しないうのに）どうしてわざわざ…」と話し始める。「ふつうなら～」が「自分なら～」と思考の中で置き換わっていくのだろう。ここでも今までの自分、そして今の自分と向き合い、自分事として捉えていく学びの姿が感じられた。この段階で「自分らしく生きるということについて考えてみたい」「人を許せる人になりたい」といった本時のねらいに関わる道徳的な価値に沿った発言が見られるようになってきた。これらの発言は、議論の方向性が全体のものとなっていく発言である。人としてよりよく生きたいと願う子どもの本心と捉え、子どもの省察の深まりを真摯に受け止めた授業を創造していきたい。

(2) 教材に潜む多様な道徳的価値から納得した道徳的価値観が生まれる協働の学び

多様な道徳的価値が潜んでいるからこそ人は判断に悩んだり、悔やんだりする。道徳が教材の力を借りて心の体験を広げ、これから生きていく心のみちしるべとなっていく時間であることが子どもたちの中でも意識されるようになってきた。自分事として考え、自分が納得した道徳的価値観を積み上げていく過程で、「対話」は必須である。

「認め合う心～銀のしょく台～」の実践では、『司教は、なぜジャンを怒らなかつたのか』という学習問題に対して、司教が怒らなかつた理由を子どもたちは多様な道徳的価値から説明していった。あえて考えた多様な道徳的価値をどう料理するかによって、自分の独りよがりな道徳的価値観に終わるのか否かの分かれ目となっていく。今回用いた学習方略として、司教の心の中の優位性を小グループで話し合い、その後、全体で摺り合わせるという流れをとった。優位性について語るということは、司教に「なりきる」自分がそこにいるということである。選択する理由を語る自分の言葉こそが、自分事として捉えた道徳的判断力そのものなのである。友達の考えと自分の考えとを比較し、再び考え直し、今までの自分、今ここに存在する自分の考えを往復しながら、これからの自分を見つめていくのだ。

議論していく中で、議論の流れを子どもに委ねることを大事にしてきたことも、子ども自身が納得する道徳的価値観を生み出す一端となってきた。教師の揺さぶりはもちろん状況をみては大事になってくるが、あくまで子どもたちの今もっている素直な感情や発言からのものと心がけている。時には、誘導したくなる教師の揺さぶりを引っ込める勇気をもつべきと自身を戒める。

2 課題 議論する学習問題に多様な道徳的価値が潜んでいるからこそ、新たな「見方・考え方が生まれることを踏まえた上で教材と向き合うことを更に意識した授業づくり

多面的・多角的に考えることができない授業はあり得ない。教材に潜む多様な道徳的価値観を洗い出す教材研究を丁寧に行っていくべきである。そして、子どもの思考がどうリンクしていくかといったシミュレーションをして臨む中で、想定不能な発言も子どもの思考も削ぐことなく、いかに子どもに委ねた深まりのある議論の場としていくかが課題である。ただ、議論の場が「いろんな考え方があったね。」といった多様な道徳的価値の出し合いでは、生きていく心のみちしるべとしては薄い。多様な道徳的価値にふれ、そこに発見があったとき、子どもは新たな「見方・考え方」を獲得していくのだろうと思う故、協働的な学びを支える学習方略を更に探していきたい。